「日々の理科」（第 1253 号）　2017（H29）, 12, 11

「晩秋の小石川植物園（１）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

私はかつて小石川に２回住んだことがある。一回目は二十台の頃で、府中から引っ越して、小石川３丁目のアパートに住んでいた。作家の開高　健さんがすぐ向かいに住んでいた。その後、一旦足立区に引っ越したが、再び小石川５丁目のマンションに引っ越した。茗荷谷駅のすぐ裏で、通勤にはとても便利だった。「小石川」という街が好きなのだ。

３丁目に住んでいたころ、「小石川植物園後援会」という会に入会した。後援会というと、「入会金」と「年会費」があるのが普通だが、この会は入会金のみ支払えば、「永年会員」となる。会員は、同行者３名を含め、何度でも植物園に無料で入ることができる「すごい特典」がついている。当然若いうちに入会したほうが得だ。私は入会してから 25 年以上たつ。たぶん、会員証で 200 回以上入園させてもらっていると思う。梅や桜の時期もすばらしいのだが、私は晩秋の今の時期が一番好きだ。

先日の土曜日、午後に２時間ほど「隙間の時間」ができたので、会員証を持って入園してきた。少し前まで、正門向かいの米田商店が入園券の委託販売をしていたのだが、今は門扉の外にある券売機で買うようになった。私は会員証を見せて、名簿に氏名を書くだけで何千回でも入れる。門扉からちょっと中をのぞいただけでも、美しい木々の色がわかる。無理して 10 月や 11 月に郊外や行楽地に出かけなくても、文京区にこんなに美しい場所があるのだ。

小石川植物園は、武蔵野台地の東端が「手の指」のように分岐した「舌状台地」と、台地に食い込んだ「浸食谷」の境目（段丘崖）に位置する。上図は小石川植物園付近の「色別標高図」である。（国土地理院提供、田中作図）正門（図の▲）は、段丘崖の下（低地）に位置している。植物園の敷地の約３分の１は、低地の部分だが、残りの３分の２は武蔵野台地上に位置していることがよくわかる。文京区には台地と低地の境の段丘崖が非常に多い。「〇〇坂」が多いのはそのことが原因である。都市化で段丘崖の原地形は破壊され、矩形になっている場所が多い。しかし小石川植物園内の段丘崖は、ぼぼ原地形を保っている。段丘崖は湧水が多いのも特徴の一つだ。この特異な地形が、多様な植生を維持させている、理由の一つになっている。

正門を入ると、すぐに結構な勾配の坂道になっている。この坂道が、低地から台地へ上る、段丘崖の道の一つということになる。